

昭和初期の貴重な詩集 ― 『磯松』復刻に寄せて―

予期しない出会い、展開、発展から生まれた復刻版である。

十二年前、山陰中央新報で「人物しまね文学館」が連載され、後に『人物しまね文学館』として二冊の本になり出版された。この連載で、島根の詩の歴史を執筆するために、田村のり子著『出雲石見地方詩史五十年』を読み、次のような記述に出会った。

「邇摩郡静間村（現大田市）で中島雷太郎、中島資喜らにより静窟詩社が興ったのは昭和五年秋。四、五年前から二人を中心に村の青年仲間を出していた『双葉』の文芸誌運動が発展したものである」。更に次のようなこともわかった。昭和五年に詩誌『洞窟』を創刊し、月刊で十七号まで発行。『山陰詩脈』に改題後、三十二号まで発行。短命な同人誌が多いなかで、息が長い詩活動である。

同じ大田市に住みながら、昭和初期にこのように活発な文芸活動をしていた先駆者がいたことを知らなかった。現物を手にするために図書館へ行ったが、中島雷太郎発行の月刊詩歌誌『山陰詩脈』二十七輯が一冊見つかっただけだった。これは立派な雑誌で県内で活躍していた高名な歌人や詩人たちの作品がたくさん載っていて驚いた。広い視野でいい作品を集めたい願望が意中にあっただろう。

地元の人たちにも雷太郎氏のことを尋ねたが、「家をたたまれて大阪の方へ行かれたらしい」というのが最高の情報だった。原本搜索は諦めたが、ブログに「島根の詩運動」を載せておいた。数年過ぎたある日、「雷太郎は私の父です」というメールが来て目を疑った。次男の康信氏からだった。雷太郎・ミヨ子夫妻共著『径づれ』のコピーも届いた。時代の色に褪せない誠実な詩や短歌が載っていた。ぼくは、劇研「空」の代表でもあり、「地域の歴史文化の掘り起こしと舞台化」という目標も掲げて活動している。静間文化協会から公演依頼があり、雷太郎氏の詩、短歌、シベリア抑留記も朗読した。大変好評だったが、雷太郎氏の詩集を知っている人はいなかった。この公演のことを友人から聞かれた東京在住の長男・康信氏との交信が始まり、今回の稀有な復刻に発展したという訳である。

雷太郎氏は全く未知の人だが、作品を読むと、自然に雷太郎像が浮かんでくる。内面深く強い夢や激情がありながら強靱な意志で制御できる温厚で社交性のある穏やかな人。一連の詩から、自己を制圧しようとする強靱な意志が透けて見える。昭和初期はプロレタリア文芸隆盛期で、同時に激しく弾圧された時代である。一連の詩には、そういう時代を反映した作品は見られない。しかし心の奥底には怒りや批判があったはずである。それを抑え込む意志も強靱だったのだろう。文学作品は時代の精神的支柱である。その意味でも読めなかった『磯松』・シベリア抑留記の復刊は貴重であり、有難い。